源氏雛解

めでたき名をつけてすまの巻よこうひ、十ぉ巻
名とおもひいてゝと侍るとぞ
めふそんふやく一部六百巻をこうづくりたてまつり
侍りしとぞ
ひろ源氏を記(しる)したる冊子(さうし)のうへを戒
アゝ有ふようそて出ぬ
こゝろにおもひて五十四帖よりなる冊子(さうし)を抱(だい)大明(みん)
約束(やくそく)より落書(らくしょ)せさせて
とぞ
ひろのうへ中よき家のよをすくれてせいでする
ゆへ名前(なまえ)をつけゝるとぞ

又いそく筈(はず)まりといふ名(な)所(どころ)をそとそ筈の先の
ゆるふんこゝろこの字よりのこゝろとぞ
又二字(じ)にてのやめのとのまり上(かみ)まで侍(はべ)るとぞ
とそつゝゆるのまりのまりこれとおもはせとやさを
ものひろようにてせ名(な)つけりもさのこざりともいう
うち大明(みん)のおろりまなをあらぜんのこゝろみはとそ
ざえつる世よりそやそうりる。人(ひと)代(よ)弐(に)おや
まをめよりもとりるとぞこゝろこのまりこまるとぞ
てめてむをめりてひとりけぜんでつ
とりするまりまりまり

ものうちもやゝいづれ
名の序よりそくつづ
上るをさしてさをよ
とみなりてふさはれ
くるさむよこうけ
のお宝ハんしりはるへて
くのせつともつるゆ
くさまの文そんをつて
のなり

栄武ア上来川院の女房
女房ともいそいひそのみつのこと
なり

○良門
○兼輔
○為時

○利基
○惟正

○紫式部

右のおもむきはんしりのつりめやとよるせる
こゝまでつゞきうつをの侍りのより
湖月抄とそ小村こ
もるまりのより

○源氏ア
○大弐三位

れるりのまり
ゐ五十四帖の巻よ四つのかゝり
ごとり三ごよ　ご初とり四まよ　ごの
まも初まもさてるまごとゐ
巻のつぎ五十四帖よ山ぶきの巻一まき引ごの巻目安
ご巻けいづ一巻そ初ご六十巻まり

き巻は源氏さんぢゅうまりき
つぼれ更衣すぐれてときめきあひ源氏を
ていよ〳〵さきそのやうひとびとやてのちつぼ〳〵ひのひかる
けさぶらひそのまのうへこゝろのねさみそへそ〳〵ふかき
ごのみふそうのみごとり二
さへありおもへまそんでいたつぼもひまへそへそ〳〵まのかゝ
むなり成のへせんそひの山のまつやこゝろぼそき更衣のまひ
れおいて巻つぼとやて巻ひの文をやまひ
源氏十二そげんぢ〳〵ものひ

の上をおそひぶみなどむこの人源氏は二条の院
にてうへをも見たてまつりをとりをも
二　はゝきゞ　第二
此巻は源氏十六年のさうがつの上のなゝ日のけ
将と申すに申すにおほきおとゞの御賀のつゐでに
女のかうとりいだしたまふ
こゝのつゐでにすべて女のうへ
源氏のうへ玉かづらのうへなどをそれ〴〵
うつせみ
三　うつせみ
此巻は源氏十六年うつせみの
かぎりなれどうつれるさまをかき
ものびてただひとりなんどをとりなしよりおとり
ありまくむしあの前のものがたり
うつせみのぬけがらをとりてそのよりどころ
四　夕がほ　第三
此巻はなんじ十六年のころほひ
我のあのつゐでにひとひ

源氏ばかりの人
詳しくかける
十八問答
源氏一部の大意
中川のつゝみ
空蝉

ぎらくふうひあそびなどぞ少
はむとつどてまもりとも源氏物語
それなどのさまざまなりてまを
の中将などものひてさんむ
おもうり給つばかり中宮よりらのさまを
八　そらのえん　廿二
巻は源氏十九歳春如中宮三位のりさがうそ
うんちんのさまのえんせさせ
ちよ給つばかりを出ひらん
そうるめれどさまりうて
ようちうりてあうふをエぶろ

さまざまは源氏古今二葉のみどりよりあり
秋の夜の行末へかけてうつろふ
えてくらやまもとも
あともなり神る月の光
ごのるともなりそ
ん下るもらうよ
消ないのこよめ
もぶくもそ
ぐ
のやそ思びてあ

小ぎくつみくんかへ
さるようつくしてむ
八橋しかけもうそ
るまでうさ
うはのうら
もそひてそのひんのこ
うひうてもあそ
あひてはもそ
きみのひびの
まんめへう

十二巻は源氏五十四帖のうち、
のこのさくひろうよ花おそ
ひいつもゆめもちうさ
ものうき
十二　次海　末九

この巻は源氏五十四帖のうち、
世の中ひろくすべてすべてのうち
朱雀院のおりそのつぎの
のうちうさ
くいてるすべてのうち
もろくれやこれ言ひなれる
ものうきそうすべてのうち

そきこえりうつ
とびんでの出そひぶ
るくおくれいてのこ
とつけうつ
まひげんでへ
海面ふ
つうびんでの出海
十二　ひうう　末十

いまさはびんでいた六年の三月
ひうを面風つまでひ
ひうひうさる

せこ屋

二十

ととめ

二十六

二十七　女三宮

二十八　野分

みゆき

この巻は源氏卅六の十二月余七日より六条院のうちの
そのよの大そうじ（大掃除）より後の
いそぢあまりのとしのくれまでをかけり

まつかげ

この巻は源氏卅七の二月よりその年のくれまでをかけり

梅がえ

二十四　つゝ初上

三十七　よこふえ

とゆうさこゆる郡波仕のおそ
のそつごの仕来りつそすう
ぐうそすりのそりのよ年月よ
小のうふりおくえりのよ
さおそのぬむすあ雨さはらら
うえものてのらそひとりの
まの小のうよひめ君二人おそ
ここうひくひめ君もてよいつ
づきりくのひめ君が五六まの
のおりくおとこ元へいのめくの
ふりそれくもいづれもりそ

とうてはどりのもよいえの仕ごろいふおひ
のやうひうひふさごろおりり

四十四

みづ川

この巻ハ九十四丁より成其内そのまゝかりむづくの仕うふ
りうる女ともの仕るにより略ゆうまみゞ
須弥の仕すゑぐまひづるまで
むもぐんくの仕のもの〳〵そゝひくのやう
のうくまこえくがのらよいふのうよ
うるはそうえこのの仕そはおとこ三人女
二人おいりくとそうくようづ
くりくむづくの仕ゆりはそてひうむう
おそのうはすぐれ面んとそのづくまやるりおりり

ふたつまや

次の巻までそれへ
かそうり

本二　みそつ

春はあらん共四のまきのお
そ雪をとりあつめこんちゅうにほりそえ
のとをひのまへをあのいてそ
りひりりそうこのるみこさい
なりおもくやまへとりやりんそ
時をそうそうしてつうこんそうげこそえ出あそびもう
なりのれはいあつうるんとうこんそうげこそえ出あそびもう

うこんそうもこのはるをとそそそそはのひでたださは
とるやまもしそうしてのこねそりをそそうそのこの
いてれとみまもりそうりそのこの
はそりいるこりそ大将そのはるそれむよ
こりりそうんとそそのはさうんとお
そのりそうこそ毒まやそうこそおて
人くまでひそ自そのはそれめひそ
そるるでそはれもりそのとも大ねとのはさうんとお
りれをあそうひるこそあるこんのるこそ
やうしの人そ大将もし人のはいれのはうこと
そうるうるかは兵のりはそそうはんそ

ひま老はうらゝ〳〵将棋のみそまつの巻うそ寒き夜のてすさびにとりいだして
そのそすあのやすらひのうつゝさをもとりまぜつゝ
のらくらつゞきさうらう巻のはてにおのれもおろかなる
そのむかしひく小ざしにせんかうもめりこゑはもろ〳〵いとゞめでたしやすきく〳〵しの大おはゆりさいや
まさうり有ふれん小ざをうてひおはしてあり
こひんしのひすさうえうさりのそひともをうつて
有のこれとも老はかつまりてそのうえん

よせ〳〵のあひてあまへもつびきつゝせ有ふくおろさよ
ろこび有みてすをとるす

源氏宇治十帖をよむ
二老けひつ一老
私合して六十老
山路の雨小戸私外そいろ〳〵のうろこそうる
ぬるうまれの老しとうれのらの人つうろこそる
うり

寛政十戊午年

二月吉日